

まゆみ
第34回 檀の会

令和3年2月11日(木・祝)

開演:午後1時半(開場:午後1時)

三十五世観世若狭範念
於:観世能楽堂

撮影:山口 直也



MATSU NO KAI

扇の展示について

今回、より深い能の魅力を感じてもらえるよう、「十松屋福井」と「檜書店」の協力を得て、会場ロビーにて「仕舞扇」「能の扇」の展示を行います。本来能楽にとって扇は、大きな役割があり、舞台の華のひとつでもあります。扇には様々なバリエーションがあり、演じ手の思考や、演目により、その決まり事は多岐に渡ります。いくつかの扇の展示から、それぞれの魅力や美しさを直に味わっていただきたいと考えております。また、「扇のいろは」と題し、解説等扇の特徴や決まり事などを解説し、また違った観点から能楽を楽しんでいただくことを目的としております。



松の会 所蔵
「鬘扇（かづらおうぎ）」

能楽ワンコイン講座のご案内

毎月1回テーマを決めて日本の伝統芸術「能」をわかりやすく解説しております。
12月には檀の会「松風」の事前講座を下記の日程で行います。
是非ご参加下さい。（資料代500円）

（開催日・テーマが変更する場合がございます）

	印西教室			船橋教室			新橋教室			練馬教室			テーマ
	月	日	曜日	月	日	曜日	月	日	曜日	月	日	曜日	
11月	11	11	水	11	10	火	11	11	水	11	12	木	能の楽器(囃子)にふれる
12月	12	9	水	12	8	火	12	9	水	12	10	木	能「松風」について
1月	1	13	水	1	19	火	1	13	水	1	14	木	檀の会(まゆみのかい)能「松風」続き 長野能「熊坂」について
2月	2	3	水	2	2	火	2	3	水	2	4	木	能「船弁慶」について
3月	3	10	水	3	16	火	3	10	水	3	11	木	能「二人静」について
4月	4	21	水	4	20	火	4	14	水	4	8	木	平家物語と能

各講座の会場や詳細につきましては、WEBサイト「松の会」をご覧ください、
または「一般社団法人 松の会」までお問い合わせ下さい。



かさい せいじ
葛西 聖司

古典芸能解説者
早稲田大学公開講座
NHK文化センター
朝日カルチャーセンター講師

NHKアナウンサーとしてテレビ・ラジオの様々な番組を担当
現在はその経験を生かし、能楽や歌舞伎など古典芸能の解説や講演、また日本の伝統文化についてのセミナーなどを全国で展開。
著書「教養として学んでおきたい能狂言」「能の匠たち」「能狂言何でも質問箱」「僕らの歌舞伎」「文楽のツボ」など



まつき ちとし
松木 千俊

観世流シテ方準職分
重要無形文化財
総合指定保持者
一般社団法人松の会代表

昭和三十七年 八月二日生
東京藝術大学邦楽科 卒業
観世流職分 武田志房に師事
平成二十八年「一般社団法人 松の会」を立ち上げ、代表として能楽文化の普及・伝承に努め、各学校での能楽教室や能楽ワンコイン講座、また毎年「檀の会・松能会・松謳会」を開催している。

第三十四回 檀の会

令和三年二月十一日(木・祝)

午後一時半 開演

(午後一時開場)
於 観世能楽堂

お話 葛西 聖司

舞囃子

龍 田 松木 崇俊

大鼓 柿原 孝則 太鼓 澤田 晃良
小鼓 成田 達志 笛 藤田 貴寛

地謡

小早川 康充 武田 武田 崇史
小早川 泰輝 武田 文志
武田 祥照

休憩 二十分

狂言

船渡 智

シテ 船頭 高澤 祐介

アド 智 前田 晃一
小アド 女 大塚 出

休憩 二十分

お話 葛西 聖司

能

松 風

ツレ 村雨 武田 宗典

シテ 松風 松木 千俊

ワキ 旅僧 安田 登

アイ 浦人 高澤 祐介

後見

武田 友志
武田 宗和

地謡

松木 崇俊 下平 克宏
佐川 勝貴 岡 久広
武田 文志 武田 志房
大松 洋一 小早川 修

附 祝 言

終了予定 午後五時半

【あらすじ】

●舞囃子 龍 田(たつた)

季節は冬。旅の僧(ワキ・ワキツレ)が奈良の社寺を巡拝し終え龍田明神参詣のため河内国へ急ぐ途中、龍田川に到着します。すると一人の巫女(前シテ)が現れ「龍田川紅葉乱れて流るめり渡らば錦中や絶えなん」という古歌をひいて呼び止めます。僧がそれは秋のことではもう薄氷の張っている頃なのにといい、更に「龍田川紅葉を開づる薄氷、渡らばそれも絶えなん」という歌もあると答え、別の道から神社に案内します。そして霜枯れの季節にまだ紅葉しているのを不審に思う僧に紅葉が神木であることを語り、さらに龍田山の宮廻りをするうちに巫女は、自分こそは龍田姫の神霊であると名乗って社殿の中に姿を消します。その夜、僧が神社で通夜をしていると、龍田姫の神霊(後シテ)が現れて、明神の縁起を語り、あたりの風景を賞美した後、神楽を奏して国土安穩を祝福しつつ、昇天してゆくのです。
※今回の舞囃子は後シテの龍田姫の縁起を語る部分から最後までを演じます。

●狂言 船 渡 智(ふなわたしむこ)

智入りのため京に住む智が、矢橋の舅を尋ね、大津松本の港から渡し舟に乗り込みます。船頭は土産の樽酒に目を付けると酒を所望し、飲ませなければ船を揺らすなどして智を脅します。仕方なく智は二杯三杯と酒を振る舞い、やがて矢橋に着きます。舅の家にたどり着いた智を姑が迎えます。姑は帰宅していない舅を探しに行くのですが、その舅こそ…。

「智入り」とは、智が結婚後に妻の実家に挨拶をして、盃事などを執り行う儀式です。当時はこの狂言のように智入りをして、初めて智が舅に会うことも少なくなかったようです。矢橋と大津松本は、それぞれ琵琶湖東西の対岸にあり、古来より東海道で京都に入る水上交通の要所でした。前半は湖上を渡す近江舟を舞台に船頭の無類の酒好きからくる一悶着を描くと、後半では舅に対する智の懐の深さを描きます。終盤の二人で舞う連舞に、智入りの目度い余韻を残して終わります。

●能 松 風(まつかぜ)

旅の僧(ワキ)が、月の美しい秋の夜に須磨の浦を訪れます。松風・村雨二人の海女の旧蹟を吊った後、とある塩屋に宿を借ろうと訪ねたところへ、小屋の主である二人の若い女の海女(シテ・ツレ)が、浜辺の夜景をめながら汐汲み車を引いて帰って来ます。僧は一夜の宿を請い得て喜びつつ、在原行平の詠歌「わくらわに」を口にし、夕暮れに吊った松風・村雨に、ゆかりのある松のことを話します。

すると女たちは急に涙を流すので、訳を問うと、実は自分たちは行平の愛を受けた松風・村雨二人の海人の幽霊であるが、行平との契りが忘れがたく、その妄執にひかれて、こうして現れ来たものだとか明かします。昔を懐かしんでいるうち、松風は行平の形見の衣を手に取り、それを抱き締めて恋慕の思いにむせびます。そのうちに松風は物狂おしい体となり、形見を身に付けて舞を舞い、僧に弔いを頼んで夜明けとともに消えて行きます。

第34回 ^{まゆみ} 檀の会

チケット申込書

令和3年2月11日(木・祝)午後1時半開演 ●午後1時開場

お申込み FAX:03-6767-5555

二十五世観世左近記念
於:観世能楽堂

座席	チケット料金	購入数
SS 席	13,000円	枚
S 席	10,000円	枚
A 席	9,000円	枚
B 席	8,000円	枚
C 席 (タブレット 字幕解説付き)	8,000円	枚
D 席	6,000円	枚
学 生 席	4,000円	枚

※座席をご指定の場合 2,000 円プラスです
(賛助会員の方は無料)

座席番号 (第1希望～第3希望をご記入ください)

第1希望	第2希望	第3希望
列 番	列 番	列 番

賛助会員の方はチェックをお入れ下さい ☐

ご住所 〒

お名前

ご連絡先

※チケットの発送開始は 12 月中旬となります。

※お申込み・お問合せを頂いた際に不在の場合は、
折り返しご連絡させていただきます。

【チケットお問合せ・申し込み】



事務担当：080-2555-0626 (佐藤)
TEL・FAX：03-6767-5555
E-mail：matsunokai@gmail.com

